

句作りのきっかけとなった 55年前の五七五

岡島 清美 (高10回)

70歳を前に人並みに終活を始めました。先ず中学時代の物から整理していると修学旅行記が出て来ました。驚くべきことにそれは当時の官報『上郷』に掲載されたもので、私には全く記憶に無いものでした。が、間違いなく私の旅行記です。読み始めると間もなく「東海道広き平野を汽車は行く」という五七五に出合いました。車窓からの濃尾平野の広々とした景色が容易に想像できます。句は現在の自分の気付きを言葉で表現する短詩とも言われますが、その気付きの一句とも言えましょう。

その頃、身体は鍛えているが、頭の体操の不足を感じていたためかこの五七五が琴線に触れ、深く考えもせず、その日から見様見真似で句作りを始めました。苦節15年、今では月3回の句会、同人誌への10句の投句と毎日句作りを楽しんでいます。55年振りの五七五の出合いに感謝頻り。

〈新年〉

鎌倉の五山詣や初電車

今年如初電車は鎌倉詣

〈春〉

寄す波に光ちりぢり葦の角

水面から出た葦の芽にちりぢりと波が寄せる

軽やかに舟の底打つ春の潮

春の潮に打たれる舟の底は何となく軽やか

囀なみの櫛たふ千年の葉陰かな

巨大な櫛の木の葉陰に鳥の囀りが聞こえる

〈夏〉

山頂の城址に出合ふ夏桜

山城の季節は遅れ夏桜に出合った

屋久杉と共に千年苔の花

屋久島の苔の花には杉と共に千年の歴史が

竹林のにはかに騒ぐ大夕立

雨かと思ったら竹林をゆらすほどの夕立に

〈秋〉

ゴンドラに見下す岳の大花野

白馬五竜岳の花畑をゴンドラに乗って見る

城垣のごとき棚田の稲架襖はだかぶすま

姥捨ての稲架が襖のように見えた

御嶽山おんたけへ嘶いなく駒や秋高し

開田高原の木曾駒の嘶き

〈冬〉

灯の滲む銀座八丁小夜しぐれ

呑んで店を出るとしぐれが街灯を滲ませていた

水脈みお二つ幅を違へず番鴨つがいかも

番鴨が間隔を変えず向岸まで泳いで行く



●おかじま・きよみ
飯田市上郷出身。青山学院大学文学部卒。俳句結社「春耕」同人。俳句と同時に絵を始めました。アクリルと色鉛筆ですが、色鉛筆は意外と好評で、ほとんど手元に残りません。一方、アクリルは処分に困っています。

ご覧いただくように私の句は客観写生を基本としており、これからもこの姿勢は変わらないと思います。目的とした頭の活性化には充分過ぎるほど。生涯続けて行きたいと思っています。

余談ですが春耕同人になったころ主宰に褒められた一句があります。そして私も好きな句です。

湘南の海の碧さに似て四葩よひら

これは鎌倉長谷寺のあじさいを詠んだもの

